

第1回 生活、総合的な学習・探究の時間ワーキング

R7.10.15

福井大学・岸野麻衣

残念ながら、本日、都合がつかず欠席いたしますので、所感を書面で提出させていただきます。

福井大学の岸野と申します。主に福井県や滋賀県で、幼児教育施設での保育の質の向上や幼保小接続、架け橋期カリキュラムの開発等の支援に携わりながら、実践的な研究を進めております。

生活科・総合的な学習・探究の時間に関する現状・課題と検討事項を踏まえて、特に重要だと考えたことを3点申し上げたいと思います。

第1に、探究に関する考え方の整理についてです。ときに「探究」が一種の型として理解され、「探究のプロセス」に当てはめればよいと考えられて推進される事例を依然として見かけることもあり、「探究」の意味する範囲や質について、改めて整理することは大変重要だと感じました。とりわけ、幼児教育においても、子どもは遊びを通して世界を「探究」していく存在であり、探究的な学びの芽を育んでいるといえます。その意味で、幼児教育での「遊び」から、生活科、総合的な学習をはじめとする探究的な学びへとどのように連続していくのか、整理していくことが重要だと思いました。

第2に、子どもの思いや願い、好奇心に基づく探究の重要性です。今回「好きを育み、得意を伸ばす」という提起がなされていますが、幼児教育においてはまさに「好き」が大事にされています。一人ひとりの子どもが、環境に身体的、直接的に関わることを通して、楽しさや面白さといった情動を持ち、それは知ることや理解することなどの知的な働きと強く結びつけます。好きになるほどもっと知りたくなるのであり、そうした循環が重要であることが明らかになっています。そして一人ひとりのこうした循環が他者と重なり、響き合っていくことが学びの深まりにつながっていくといえます。これは幼児期に限らないことであり、こうした実践が可能となるような方策を考えていくことが非常に重要だと思いました。

第3に、生活科においては、前回の改訂でスタートカリキュラムが明確に位置づけられたことは幼保小接続の推進において非常に大きいことだったと評価しています。しかし、「架け橋期」としては、少なくとも小学校1年生の1年間すべてを含みます。スタート時期にとどまらず、年間を通じて、幼児期からの連続性を踏まえて合科的・関連的な指導の工夫を提起していくことが重要だと思いました。

以上です。